

## 年頭所感 日本社会福祉学会のこれからの課題

一般社団法人日本社会福祉学会 会長 岩崎 晋也（法政大学）

会長の任期も、5月の総会までとなりました。2年前、学会ニュース72号で会長就任にあたってのご挨拶をしました。そこでは、「学会規模の巨大化は、会員相互の顔が見える学会から、様々なアプローチから社会福祉に関心をもつ多様な会員によって構成される学会に変貌したことを意味するのではないのでしょうか。とすれば、多様化した会員ニーズにこれまでの学会活動が十分に応えられているのかが今問われなければならないと考えます。」と書かせていただきました。自ら投げかけた問いに、十分に答えられたのかというと忸怩たる思いもしますが、今期の理事や監事の皆さま、学会活動にかかわっていただいた会員の皆さまのご尽力により、いくつかの点については前進できたのではないかと考えています。

一つ目は、学会活動におけるルールの明文化です。会員相互の顔が見えていた時代では、学会活動の「お作法」については、暗黙のルールで十分でした。新しい会員に先輩の会員が「お作法」に外れないように教えれば事足りたのです。私も、学会員になって初めての大会報告や論文投稿の時は、先輩の会員から様々なことを教わりました。しかし会員相互の顔が見えにくくなると、こうしたやり方では機能しなくなります。暗黙の「お作法」は、明文化された「規約」や「ガイドライン」に変わらざるを得ないのです。実際、近年の大会では研究倫理上の問題がある自由研究報告が後を絶たない状況にあり、ルールの明文化の必要性を強く感じています。特に研究倫理上の問題は、単に「お作法」が下手であるという問題ではなく、研究対象者の人権を侵害する行為にもなりかねません。こうしたこともあり、次回の総会では、研究倫理に関する検討委員会（委員長：山田壮志郎理事）が中心になってまとめていただいた「日本社会福祉学会研究倫理規程」、「研究倫理規程にもとづく研究ガイドライン」、「学会発表に関する注意事項」を提案させていただきます。

二つ目は、会員ニーズに改めて向き合うという点です。具体的には、参加者数が減少傾向にある全国大会に対する会員ニーズと、支援の必要性が指摘されている若手・女性会員のニーズについてです。それぞれ大会のあり方検討委員会（委員長：原田正樹理事）と若手・女性研究者に対する支援検討委員会（委員長：保正友子理事）を設置し、いずれも会員を対象としたアンケート調査を行い、検討を進めてきました。アンケート調査を行ったことで、改めて気づかされた重要なご指摘をたくさんいただきました。どこまで会員の皆さまのニーズに学会として応えられるのか、現在検討しております。これらの点も、次回の総会で提案させていただく予定です。

これらの他にも、これまでの学会活動が大きく飛躍した分野もあります。国際学術交

流促進委員会（委員長：黒木保博副会長）を中心に進めてきた日中韓の学術交流が大きく実り、正式に3カ国の協定となり調印しました。今後は中国の学術団体との相互の自由研究報告交流もスタートします。それにともない学会ホームページの韓国語と中国語への一部対応についても検討を開始しました。

ただし会長就任にあたってのご挨拶に書かせていただいたことの内、実現できなかったこともあります。

学会としての今後のあり方についての中期ビジョンを策定したいと書きましたが、着手できませんでした。先に挙げた短期的課題の検討に時間をとられ、中期ビジョンの検討までは難しかったと言えます。また学会としての社会的発信を行うという点についても、十分にはできませんでした。神奈川県障害者支援施設「やまゆり園」の事件に対して、学会ニュースに会長としての意見を寄稿したものの、学会として社会に対する発信という点では不十分であったと反省しています。

以上の成果や課題は、次の会長、そして理事会に引き継ぐこととなります。日本社会福祉学会は、会員動向の変化や国際化だけでなく、社会福祉政策や実践をめぐる環境もめまぐるしく変化しており、時代の動向に応えた社会的発信や学会活動がますます求められています。また、社会福祉系関連学会が増えてきた中、社会福祉系親学会としての役割をいかに果たすのかも改めて問われていると思います。こうした難しい課題について、決して次の会長や理事会に「丸投げ」するのではなく、学会員の一人として「わが事」として感じながら、今後も微力を尽くしたいと思っておりますので、会員の皆さまにおかれましても学会活動にご理解とご協力をお願い申し上げます。